

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月19日現在

機関番号：34605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11782

研究課題名(和文) グループホームの終末期ケアにおける看護連携を強化するための教育支援システムの開発

研究課題名(英文) Development of education support system to strengthen nursing cooperation in end-of-life care of group home

研究代表者

山崎 尚美(平木尚美)(YAMASAKI, NAOMI)

畿央大学・健康科学部・教授

研究者番号：10425093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、グループホーム(以下、GH)の看護職が認知症高齢者の終末期ケアの実践教育プログラムの開発を目的とし、教育介入した集会的研修会の教育内容を検討した。研修会の満足度は高いものの、一部の項目については理解度を確認できているが、一方では理解度の低い項目について今後も継続して研修内容の補強を図る必要がある。

4年間の研究成果としては、「グループホーム看護職のための介護職との連携強化するための教育プログラム」を作成し、「グループホーム看護職のための終末期ケアの質指標」を作成したことから一定の成果があったと評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果としては「グループホーム看護職のための介護職との連携強化するための教育プログラム」を作成し、「グループホーム看護職のための終末期ケアの質指標」を作成したことから、今後においてグループホームの介護職と看護職が連携を図る際に、作成した連携強化プログラムは教育システムにシフトして活用できると考える。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop a practical education program for end-of-life care for elderly people with dementia in Group Home (hereinafter referred to as "GH") nurses, and examined the educational content of the collective workshop in which the education was intervened. Although the degree of satisfaction is high, the degree of comprehension can be confirmed for some items, but it is necessary to continuously reinforce the contents of the training for items with a low degree of comprehension.

As research result of four years, we made "educational program to strengthen cooperation with care worker for group home nursing" and made "quality index of terminal care in group home nursing". Therefore, it was evaluated that there was a certain result.

研究分野：高齢者看護

キーワード：認知症高齢者 グループホーム 終末期ケア質指標 看護連携 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

わが国の認知症高齢者数の増加とともに 1992 年より、認知症対応共同生活介護事業(以下、グループホーム)が全国各地に新設され、2014 年 9 月では約 12,000 か所にまで普及してきた。認知症高齢者の終末期ケアの実態として、グループホームの終末期ケアに関する全国調査結果から、回答したグループホームの 48.2%が終末期ケアを経験しており、グループホームで看取することはめずらしくなくなっている(平木:2010a)。その必要性から 2008 年には「看取り介護加算」が策定され、常駐化こそ義務付けられていないもののグループホームの看護職の配置率は 29.4%となっている(山崎:2014a)。グループホームにおける看取りでは介護と医療の連携が不可欠であり、特に看護職の協力の重要性が報告されている(小長谷:2010, 松井:2010, 平松:2010, 古村:2011)。また、グループホームの終末期ケアにおける連携時の課題として、24 時間の情報共有や研修会が必要であり、連携体制や連携システムの構築が期待されていた(平木:2010b, 平川:2013)。そこで、研究代表者らは全国のグループホームに対して終末期ケアの実態調査を実施し、グループホームの介護職は医療スタッフがいない中での終末期ケアにおいてひとりで夜勤をすることや看取りの経験がないことから不安や恐怖を感じていること、グループホームで終末期ケアを実施するためのケア体制の確立や医療と介護の連携が図れていないことなどの課題を把握した(平木:2010c, 北川:2011)。また、2012 年 9 月に策定された 認知症施策推進 5 か年計画(オレンジプラン)のなかで、医療・介護サービスを担う人材の育成では「認知症ライフサポートモデル」(認知症ケアモデル)として、早期から終末期までの継続的な関わりと支援に取り組むことや介護・医療・地域社会の連携による総合的な支援体制を目指すことなどの終末期ケアを見据えた認知症ケアの重要性や多職種連携の必要性を提唱しており、殊に介護職と看護職の連携の重要性を強調している(厚生労働省:2012)。研究代表者らは介護職が安心して終末期ケアを実施するために看護連携システムを開発し、その有効性を検証した(平木:2012, 平木:2013a, 山崎:2014b)。その結果、介護職と看護職の連携システムは、介護職の立場から教育内容や連携のための研修会の実施が構築されているため、介護職に対しての有効性は確認されたものの、教育課程の異なる看護職には不十分であることが明らかになった(菊本:2014)。また、看護職は今までの経験からグループホームでの自然な看取りでは何も手が出せないことへの葛藤やもしかしたら延命できたのではないかと介護職とは異なったジレンマを抱いていることが新たな課題として報告されている(山崎:2014c)。欧米では、認知症高齢者の終末期のケア体制は、在宅で看護職が中心になり、医療と福祉をコーディネートして推進していることが一般的である。研究代表者は 2009 年にスウェーデン王国の先駆的なグループホームで終末期ケアを視察した際に「ASHI という訪問医療(看護)を中心に医師介護職とチームでケアするという医療連携システムが整備されていた」と報告した(平木:2010d)。また、2013 年のメルボルンでの終末期ケアに関するヒアリング調査では高齢者ケア施設、特に認知症高齢者の終末期ケアにおいては看護職がリーダーシップを発揮し管理職としてマネージメントを行っていたことが明らかになった(平木, 2013b)。しかしながら、わが国のグループホームでは看護職が管理職という事業所は、全国のグループホームの 13%にとどまっている(山崎:2014d)。

以上の国内・国外の研究動向より、終末期ケア時の介護職と看護職の連携システムを強化するために、看護職がマネージメント能力を保有しグループホームの介護職と医療連携している看護職のための教育支援ツール及び教育支援システムを開発する研究の進展が課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、3 年間で以下のことを実施する。グループホームと医療連携をしている看護職に対する終末期ケア時の実態把握(ニーズやジレンマなど) 文献による最新の知見や過去のグループホームの終末期ケアの事例から、看護職の役割を検討する。明らかになった結果を基に認知症高齢者の終末期ケアに関する看護職のための教育内容とその方法を検討する。看護連携システムを洗練するために、認知症の終末期ケアに精通した専門家およびグループホーム管理者・看護師・訪問看護師とともに内容妥当性を検討する。認知症高齢者の終末期ケアに関する教育教材コンテンツを作成し 先行的研究成果と から の結果より教育支援システムを作成し試用および評価することを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### [研究協力体制]

本研究では、研究体制としてグループホーム管理職、老人看護専門看護師、認知症看護認定看護師、老年看護学分野の教員で構成した。研究を効率良く進めるために、研究分担者を3班(実態調査班・内容検討班・教材作成班)に分けて遂行する。3班の担当内容は地域性と専門性を考慮して、合意のもとに決定した。

平成 27 年度

文献による最新の知見の把握(山崎・南部)

国内のグループホーム看護職への実態調査(百瀬・山崎)

国内・国外のモデル施設の看護職への実態調査(天木・山崎)

「終末期ケア時のジレンマと看護職の役割」に関するフォーカスグループ・インタビュー(天木・南部・山崎)

グループホーム看護職に対する終末期ケア時の実態把握・文献検討

平成 28 年度・平成 29 年度

グループホーム看護職のための教育内容と教育方法(案)の検討(全員)

認知症の終末期ケアに精通した専門家(CNS, CN)およびグループホーム管理者・看護師・訪問看護師とともに教育内容および教育方法の内容妥当性を検討(坪井・小野・山崎)

終末期ケアに関する教育教材作成(宮崎・山崎)

終末期ケアにおけるグループホーム看護職のニーズ把握

グループホーム看護職のための教育内容と教育方法(案)の作成

平成 30 年度

教育支援システム(案)および終末期ケアの質指標の完成(山崎・百瀬・宮崎)

教育支援システム(案)を用いた集合的研修会の実施・評価(全員)

報告書の作成・研究成果の公表(全員)

グループホーム職員のための教育支援システムの完成・評価

### 4. 研究成果

平成 27 年度は、文献研究およびグループホームの終末期ケア研修会の実施、看取りの状況を情報収集した。グループホームの終末期ケア研修会に参加した受講者の終末期ケアに関する基礎知識の習得状況、主観的理解度、死生観について分析した。

対象はA県内の2地域のグループホームの職員で終末期ケアに関する研修会に参加した受講生62人、終末期ケア研修会開始直前と終了後に高齢者の終末期ケアに関する基礎的知識を問う小テスト10問を実施し、その正答率の推移をデータとした。分析方法:研修会前後の小テストの得点の前後の正答率の差を比較した。対象の概要:受講者62人のうち、小テストに解答したものは57人であり(回収率91.9%,有効回答100%)であった。グループホームでの経験年数は6.9年(±4.3年)、介護職56人・看護職1人であった。小テスト10問の正答率は、全体で研修前69.7%、研修後77.9%であり、その差は8.2%であった。最も正答率が高かった問いは、研修会前後ともに「医師や看護師への連絡の時期」であり、最も正答率が低かった問いは「死の身体兆候」であった。また、最も正答率が向上した問いは「グリーフケアの開始時期」についてであった。研修会前後の基礎的知識の習得は終了直後にはなされていることが確認された。終末期において、正答率の低い「死の身体兆候」や「グリーフケア」に関する項目について、研修内容に加え、今後も継続して学習する必要がある。死生観については、問24の「家族や友人と死について語る」の項目のみ、看取りの経験の有無との有意に差を認めた。看取りの経験が約75%はあるものの看取りの経験にかかわらず死に対する恐怖や不安を抱えており、その不安解決のためのフォローアップ研修会や事例検討会の場の提供が必要なが示唆された。

平成 28 年度は、文献レビュー 半構成的面接法による質的データ収集を行った。また、情報の共有および役割分担、研究計画の再考のための 科研会議を合計5回実施した。国内3カ所(兵庫県2カ所および和歌山県1カ所)のグループホームにフィールド開拓を目的として 施設見学および終末期ケアの実態についてヒアリングを行った。看護系や認知症ケアに関連の学術集

会等に参加し、最新の知見を情報収集した。海外訪問は、予定していた豪州の対応予定の看護師の都合により渡航が延期となり、再度の訪問計画は本務との日程調整が困難であったため中止した。しかし、台湾からグループホーム管理者を招聘して、終末期ケアに関する研修会を開催し、その内容を紀要に投稿した。

文献レビューの結果は、平成29年度5月に日本認知症ケア学会において成果報告予定である。また、半構成的面接法によるインタビューでは、国内9カ所のグループホーム(東京都3カ所、愛媛県1カ所、岡山県1カ所、愛知県1カ所、福岡県1カ所、和歌山県1カ所、宮城県1カ所)、合計17人の管理者および看護職(訪問看護師・看護師)にインタビューを実施した。得られたIC記録は逐語録化しており可視化可能な記述データとして現在、分析中である。学外の分担者との科研会議の実施については、畿央大学、愛知県立大学、宮城大学およびインタビュー時に実施しており、データ収集方法について、分析の方向性について随時、検討している。学内の連携研究協力者との科研会議については、畿央大学内で1回実施するとともに、情報交換を行い、連携を図った。フィールド確保のためのグループホーム訪問については、兵庫県、和歌山県で実施したが、両者とも後のインタビューを実施または、次年度インタビュー予定のグループホームにつながっている。学術大会においては、前年度の成果報告および最新の知見を情報収集した。

平成29年度の研究の目的は、グループホームに勤務する看護師のための終末期ケアの質指標の作成およびグループホームに勤務する看護職のための終末期ケアの教育プログラム内容の把握、そして把握したプログラム内容をもとにe-learningの教育システムを設計することであった。具体的な研究活動の実施予定としては、グループホームに勤務する看護師のための終末期ケアの質指標の作成およびグループホームに勤務する看護職のための終末期ケアの教育プログラム内容の把握、そしてその教育プログラムを用いてe-learningを設計し、e-learning教材を活用した集会的研修会の実施・評価を行うことであった。

研究成果としては、最新の文献のreview、グループホームに勤務する看護師のための終末期ケアの質指標(案)を作成したこと、およびその質指標の内容妥当性の確保のための全国調査の準備、学会発表(国内1件、国外1件)、最新の知識の情報収集として学会に3回参加し、海外(メルボルン)からの終末期ケアの最新の情報を収集するために講師を招聘し講演(研修)会を行ったことである。終末期ケアの質指標を作成するために高齢者ケアや終末期ケアの専門家、実践家の参加を依頼し合計2回の検討会を実施した。また、研究の進捗状況の確認や調査票発送先の確認などの会議を4回実施した。しかし、終末期ケアの質指標の内容妥当性の確認のための全国調査およびグループホームに勤務する看護職のための終末期ケアの教育プログラム内容の把握のための全国調査の発送リストは作成したが、郵送の時期が年末にかかり回収率の低下が予測されたため、回答数を確保するために調査時期を延期し、その後の教育プログラムを用いたe-learningの設計、e-learning教材を活用した集会的研修会の実施・評価についても今年度に延期する運びとなった。

平成30年度の研究の目的は、前年度作成した「グループホーム看護職のための終末期ケアの質指標」の予備調査、および試用可能か否かの本調査を行った。そして、内容妥当性の確認を行い、71項目の質指標を作成した。

また、前年度までに作成した「グループホーム看護職のための介護職との連携強化プログラム」を用いて、11月23日に「グループホーム看護職のための終末期ケア研修会」を開催(介入)した。グループホーム17事業所から看護職47人の参加があった。その研修会の教育内容の妥当性についての結果は以下の通りである。

【目的】本研究では、グループホーム(以下、GH)の看護職が認知症高齢者の終末期ケアの実践教育プログラムの開発を目指し、教育介入した集会的研修会の教育内容を検討する。

【研究方法】GHの終末期ケア研修会を受講した看護職47人に対して、研修会直後に自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、基本属性(年齢、看護職の経験年数、GHでの通算経験年数、勤務形態、看取り経験数、終末期ケア時の困難経験、解決方法、必要だと思ふ研修内容、研修内容の理解度クイズ(終末期症状、グリーフケア、意思決定支援などの10項目、正否回答方式)、

分析は、SPSS 25.0 を使用して、記述統計および Wilcoxon 符号順位検定で受講前後の正答数の平均を比較した。

【研修会の概要】対象:A 地域の GH 看護職,実施:2018 年 11 月 23 日 3 時間,研修内容:認知症高齢者の終末期ケアの概要,病院における終末期ケアとの違い,倫理的な課題,GH の終末期ケアにおける看護職の役割などの講義形式

【倫理的配慮】当該大学の倫理審査委員会承認をうけて,研究協力は自由意思のもとに参加し,調査票等は返信をもって承諾を得た。

【結果】 研修会受講者のうち,調査協力をした 34 人,平均年齢 50.6 歳(SD=10.1),平均看取りの経験数 8 件,受講の動機としてはこれから必要になってくるから,現在困っているなどの回答が上位を占めた。資料の活用性については,95.0%の受講者が満足していた。講義内容の理解度(4 件法)については,「病院の看取りと施設の看取りの違い」61.8%,「認知症高齢者の終末期ケアの特徴」55.9%,「認知症高齢者の意思確認の困難さ」72.5%がとても理解できたことの上位を占めていた。終末期ケア時の困難感では,介護職との連携のあり方,職員間の認識のずれや効果的な研修企画ができなかった。必要な研修内容は,カンファレンスのもち方,職員全体での看取りの研修会や勉強会の実施方法などであった。研修内容の理解度クイズは,受講前後の正答数の平均を比較したところ,問 4「身体的な死前兆候」(P=0.021),問 5「グリーフケアの時期」(P=0.002),問 9「意思決定の可能性」(P=0.024)では正答率が高い項目として有意に差を認められた(P<0.05)。また,受講前後の正答率の差を認めなかった項目については,基礎知識として受講前から正解していた。

【考察】以上から,研修会の満足度は高いものの,一部の項目については理解度を確認できているが,一方では理解度の低い項目について今後も継続して研修内容の補強を図る必要がある。以上,4 年間の研究成果としては,「グループホーム看護職のための介護職との連携強化するための教育プログラム」を作成し,「グループホーム看護職のための終末期ケアの質指標」を作成したことから一定の成果があったと評価した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

百瀬由美子,山崎尚美:認知症高齢者の終末期ケアの現状と看護師の役割,臨床老年看護,第 23 巻 1 号,2016. 査読無

天木伸子,山崎尚美:認知症高齢者の終末期ケアの現状と課題-一般病院での看取り-,臨床老年看護,第 23 巻 2 号,2016. 査読無

山崎尚美:認知症高齢者の終末期ケア -グループホームでの看取り-,臨床老年看護,第 23 巻 3 号,89-96,2016. 査読無

山崎尚美:認知症高齢者の終末期ケア-多職種連携のあり方-,臨床老年看護,第 23 巻 4 号,93-97,2016. 査読無

山崎尚美:認知症高齢者の終末期ケア -連携マニュアルなどの活用と看護連携システムの構築-,臨床老年看護,第 23 巻 5 号,105-112,2017. 査読無

山崎尚美,對中百合:Australia の終末期ケア-Melbourne・Brisbane の終末期ケアの現状,畿央大学紀要,13(1),45-49,2016. 査読有

山崎尚美,陳 玲穎 王 瑞敏:台湾における認知症高齢者の終末期ケアの実際と課題,畿央大学紀要,13(2),73-81,2016. 査読有

〔学会発表〕(計 5 件)

山崎尚美,百瀬由美子,天木伸子,南部登志江,島岡昌代,松原寿美恵:グループホームの終末期ケア研修会に参加した受講生の死生観,第 17 回日本認知症ケア学会学術集会,2016.

山崎尚美,島岡昌代,南部登志江,百瀬由美子,天木伸子,小野幸子:A 県下グループホームの終末期研修会に参加した受講者の知識の習得状況,第 21 回日本老年看護学会学術集会,2016.

南部登志江,山崎尚美,百瀬由美子,天木伸子,島岡昌代,松原寿美恵:関西地域 2 県のグループホームの職員に対する終末期ケア研修会の評価,第 17 回日本認知症ケア学会,2016.

山崎尚美, 百瀬由美子, 天木伸子, 藤野あゆみ, 島岡昌代, 南部登志江: グループホームの終末期ケアにおける看護職のための教育内容の検討, 日本老年看護学会第24回学術集会, 2019.  
N.Yamasaki, Y.Momose, N.Amaki, A.Fujino, K.Tsuboi, S.Ono, M.Shimaoka, H. Uenaka :Development of set of end-of-life care assessment indicators for group home nurses, 11<sup>th</sup> IAGG, 2019.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名: 百瀬 由美子

ローマ字氏名: (MOMOSE Yumiko)

所属研究機関名: 愛知県立大学

部局名: 看護学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 20262735

研究分担者氏名: 天木 伸子

ローマ字氏名: (AMAKI Nobuko)

所属研究機関名: 愛知県立大学

部局名: 看護学部

職名: 講師

研究者番号(8桁): 40582581

研究分担者氏名: 小野 幸子

ローマ字氏名: (ONO Sachiko)

所属研究機関名: 新潟県立看護大学

部局名: 看護学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 70204237

研究分担者氏名: 坪井 桂子

ローマ字氏名: (TSUBOI Keiko)

所属研究機関名: 神戸市看護大学

部局名: 看護学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 80335588

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名: 南部 登志江

ローマ字氏名: (NAMBU Toshie)

研究協力者氏名: 宮崎 誠

ローマ字氏名: (MIYAZAKI Makoto)

研究協力者氏名: 島岡 昌代

ローマ字氏名: (SHIMAOKA Masayo)